東方厨二伝

滓魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方厨二伝

【Ｎコード】
Ｎ８７８２Ｘ

【作者名】
滓魔

【あらすじ】
なぜか目が覚めたら森の中だった。
※主人公は南斗聖拳を主に使いますが能力もこれからなんとなく便利なものにしていくつもりです。

～程度の能力と南斗（前書き）

なんだか妄想が抑えられずに書いてしまいました。
なんだか今かかなければいつ書くんだという気になってしまいまして…
自分はテンションが高くなるとたまにおかしなことをかくのでご了承ください。

～程度の能力と南斗

ああー東方いいよ東方

てか…常識外れもいいとこだな…

はぁ～いきたいなー死んでもいいから行きたい…

さて寝よう…

うーむ…眠れん

学校とかでは十秒くらいで眠気が襲ってくるのに…

なぜか家では一時間以上眠くならないんだよな…

…眠く……

「よく寝た、よく寝た」

「うん？」

そこで俺はおかしいことに気がついた。

なんだか体が軽いような…というかそれ以前に寝ていた場所がおか

しい。
どこだここは
辺り一面、木、木、木、木…木しかない。
つまり森ということだが…俺は家の布団で寝たのであってこんなところで寝た覚えはない。
というか夢遊病？それとも俺の厨二病が悪化したか？
いやそのまえにこれはそもそも現実なのか？
現実に近い夢なら何度も見たことがある。

今回もその可能性が高いな…

三十分ほどその場で座ってゆっくりと考え景色を眺めていたら俺は自分の名前さえ思い出せなくなっていた。
どういうことだ？
俺はたしかに忘れっぽいしのんびりで厨二だけどさすがに自分の名前を忘れるほど物忘れが激しいわけがない。ましてや俺はまだ十五歳だ。
そんな年でもない。

しかたがないので適当にのんびりと歩くことにした。

俺のこの時の考えは真っ直ぐ歩いていればいつか出られるだろうという楽観的な考えだった。

しかし現実は非常である。
木以外に見つかったものといえば洞穴と滝と谷だけだった。

…いくらなんでもおかしい。
すると俺の頭の中にこんな言葉が浮かんできた。
忘れる程度の能力…　眠る程度の能力…

「…」

思わず俺は茫然としたまさか、自分の厨二病が自動的に能力名を考え記憶を失い妙な夢を見てしまうほどに進行していたなんて…
そう思っていた時期が俺にもありました。

だが適当に思いついた妄想をしていたらなんと森の中からでられたのだ。

ヒャッハー！外だー！

そして、俺は喉が渇いたので嫌々ながら近くにあった水場で水を飲むことにした。
このとき俺は気づいてはいけないことに気づいてしまった。
なぜか俺の顔がアニメ風になっていたのだ。

「…こりゃまじめに考えないと…いや…なるようになるだろう」

俺はどちらかというと心の中で考えてあまり口にはださないタイプだ。
それに俺はいつも運頼みで何事もなるようにしかならないと考えている。
困った時の神頼みってな。

そして俺は適当に神頼みで矢印を四方向に書き選ぶことにした。
「どれにしようかな、天の神様の言うとおり！」

俺が選ぶことになったのは森を抜けてちょうど右の方向だった。
ふぅ…しっかしなんだかなぁ…なんだかこう東方に来たら来たで嬉しいんだけど…
目的をまた一つ達成したって感じで虚無感というか虚しいというか…が襲ってくるんだよねぇ

さーて進路が決まったのはいいが問題はこの能力の使い道だ。
眠る程度の能力はまだ使い道がある。
夜に寝たいときに便利だ。
が、問題はもう一つの忘れる程度の能力だ。
進化でもしてせめて対象を俺じゃなくて他人にしてほしいもんだ。
このままじゃ本当に何もかも忘れることになる。

うーん…ところでここはどこで今は何年なんだろうか…

これが分からなければまるでお話にならないからな…

はぁ…もういいや森に戻ろう…

やっぱこういうときは一番最初にいたところから動かないのが一番だよね

適当に途中にあった洞窟にでも住むかな

ところで洞窟の場所…覚えてないんだが？

どうしてこうなったと言うしかないな

そういえばこういうのってほとんどは妖怪になってたりかなり大昔だったりそのまんま幻想入りてきな展開だよな…

俺の場合はどうなんだろうか…

なんだか直感的に大昔な気がしてきた。

だって色々と環境がおかしいし…

うーんそういえば最後に見たアニメは北斗の拳だったな…

しかし南斗も北斗もチートすぎだろ。

こうしゅぱっと

シュッ

スー

ボトッ

「これがリアルボトリ！」

って…ちょっとまて
今何が起きた…
俺は賢くはないし馬鹿の中の馬鹿だがこういうときは冷静になるのが重要だったはずだ
…まず整理しよう俺は北斗と南斗はチートすぎだと思った⇒南斗のイメージ通りに手を横に振った⇒木が切れて地面に落ちた…
俺も人間卒業か～
いや…まてよ…冷静に考えたらこれはこれで…
しかもその気になれば「お前はもう死んでいる」ができるじゃまいか！？

あ…だめだ…忘れた…
ナンテコッタイ…
こうなったら八つ当たりしかないな…

「ふんッ！」

俺は思いっきりちょうど横にあった木に腕を振った
すると木は面白いように壊れて吹き飛んで行った。

～数時間後～

これはひどいw
もう色々と滅茶苦茶になっていた。
すっかり忘れていたが俺の恰好は自転車や車の書かれた子供っぽい
パジャマだ。
いやおかしいということは自覚してる…こんな年にもなって…ってな

だが仕方ないだろう。
家に碌なものが置いていなかったのだ…

ふぅ…これからは南斗を鍛えていくかな…

だって北斗とかいちいち覚えてねーし

覚えたとしてもどうせ忘れるし…

はぁ…

「南斗獄屠拳！」

スタッ…

決まった…

ハッ！

いかんいかんこういうので慢心したらいかん！

だいたい東方の住民はみんなとんでもない化け物だったはず…

これからゆっくりと力をつけていくしかないな…

南斗を再現することにも今のところは一部だが成功しているし南斗孤鷲拳の再現は一通り終わった。

他の南斗の技はためしてないけどな…

これからの予定はこうだ。

まずは南斗の技を体に覚えこませ、これでもかというくらいとにかく技を使いまくる。

そして何度か同じことを繰り返してこの森をでるというものだ。

でなければたちまち全てを忘れることになるだろう。

そうなってもせめて最低限戦えるようにはしておきたいのだ。

くそぅこれも全て能力のせいだー！

眠くなってきた…

お休みなさい…

～程度の能力と南斗（後書き）

どうでしたでしょうか？
少しくらいハンデがないと主人公が最強なだけの話になってしまいそうだったので…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8782x/

東方厨二伝

2011年10月24日02時02分発行